



最後の晩餐のこと

1. 2024年7月26日から8月11日までの間夏期オリンピックとパラリンピックがフランス・パリで開催され、その中で、開会式がその洗練さにおいて一味違ったことで話題を呼んだ。

ところが、エッフェル塔近くのセヌ川に架かる橋で演じられた、女装して踊るドラッグクウィーンらが、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最後の晩餐」の構図を再現したことに対して、キリスト教団体などから批判が出た。

演出担当者は、パロディー文化を含め、フランスには創造や芸術の自由があることを伝えたかったと主張する。

2. ダ・ヴィンチ（1452. 4～1519. 5）は、万能の天才と称され、絵画だけではなく、音楽、彫刻、舞台芸術、服飾デザイン、乗り物の発明、軍事兵器の開発などで、数え切れないほど、あらゆる分野で活躍したことはよく知られている。

ちなみに、生まれは、4月15日の夜3時とあるが、時差を修正すると、夜の10時となり、日本時間では4月16日に当たるとか（池上英洋著「ダ・ヴィンチの遺言」KAWA DE 夢新書刊）。

牽強付会もいいところだが、私の誕生日と重なり、なんとなく、ダ・ヴィンチに対して親近感を抱いてきた。

3. それだけではなく、以下の話を知ると、なお一層、ダ・ヴィンチのこと（人間味）が好きになった。

一つは、天才と聞けば、我々は、初めからそうであったかと思勝ちだ。

ところが、上記著作によると、ダ・ヴィンチは、出生の秘密を抱え、それ故に、数奇な運命を辿っており、修業時代はダメ息子呼ばわりされていたとある。

仕事は放棄するは、挫折や敗北続きとくる。

加えて、ダ・ヴィンチが、職を得ようとして、ミラノに提出した自薦状が残っていて、それには次なる大言壮語なるアイディアが書かれていたというから、凡人ではとても叶わないが、ただひたすらに自らの才気を信じ込んでいた姿が垣間見える。

- ・頑丈ながら軽量にて持ち運びができる橋
- ・砲撃が不可能な城を落とす策略
- ・砲撃に耐えられる船
- ・敵に気付かれずに抜け穴を掘る方法

(他多数)

4. もう一つある。

ダ・ヴィンチは、人物を描くときは、まずその人物が、性格も含めて、何者であるかを分かってからにせよ、と主張していた。

これまでにない画期的な発想であり、「最後の晚餐」の絵画がそれを最高に具現しているとされる。

新約誓書のマタイやヨハネの福音書で伝えられている、イエス・キリストから「この中の一人が私を裏切る」といわれたあの場面のことだ。

驚いた使徒の12人について、各人の性格に合わせて、ある者は私は無関係だといい、またある者は怒って反撃に出ようとしたりするなどの一瞬の所作が、映画の一コマを見るように、的確に捉えられている。

そして、裏切り者のユダは、他の全員と同じ列に配置して特別扱いをしていないが、その手振りなり表情からかそれとなく分かるように描かれている。

これこそ、ダ・ヴィンチでなければできない第一級の秀逸な芸当といえる。

最後の晚餐はダ・ヴィンチを入れて、7人の画家が描いているが、12人の心理まで描写しているかとなれば、自ずとその評価に違いが出る。

私は、こうして、絵の観賞の仕方を学ぶことができた。納得もしている。

情報BOX

冤罪被害の救済

日弁連が支援している、「袴田事件」の再審公判は、2024年5月22日ようやく終結となり、9月26日には判決の言渡しが予定されている。

5点の衣類が捏造されたものかが大きな争点になっており、赤みやDNA鑑定をめぐって、弁護側は科学者3名、検察側も科学者2名を立てての証人尋問が行われ、そのうち5名の証人が一堂に会した対質方式尋問まで行われたとある。

ところで、確定判決には法的安定性が求められ、またそうでなければならぬが、だからといって、罪なき者の救済が一切閉ざされたままにしておくことは許される筈もない。

人は過ちを犯す。訴追する検察官、判断を下す裁判官、弁護に当たる弁護士も、あってはならないが、いくつかの事情が重なり過誤が生じたりする。

刑事手続で誤った結果は、全く惨酷であり、被害に遭った者の命を奪ったりする（国家による人殺し）ほか、金銭で補償できない甚大な人権侵害をもたらす、人生そのものを狂わせて取り返しがつかなくなる。

「過ちを改めざるは、これを過ちという。」は、有名な孔子論語にも出ている。

過ちを改める術が整っていることによって、正義が貫かれるというものだ。

ところが、516条もある刑事訴訟法の中で、再審手続はわずか19条しかなく、不利益再審禁止を除くと、ここ100年は改正が手つかずのままできた。

ということは、再審手続は、「職権主義」によって進められ、すべてが裁判所任せの状態に置かれる。

通常の公判は、当事者主義が採用されており、弁護側は、誤判排除と人権擁護のため、検察側に証拠の全面開示を求め反証資料の発掘にも取り組む。

この点、裁判所任せでは、(第一に、) そんなことは期待もできないし、(第二に、) 検察官は証

開示のルールがないことを盾にして協力しない。

それだけではない。

再審開始決定が出されても、(第三に、) 検察官は抗告の申立てをして引延しにかかる。袴田事件では、事件発生から48年、第一次再審請求からは33年経って、ようやくのこと、開始決定がなされた。

検察側は、再審開始決定に対して、メンツに拘ってか、必要以上に抵抗する。起訴の段階ですべての証拠を提出するか、開示しておけば、こんな異常というべき事態が将来されることもない筈だが。

また、(第四には、) 証拠物が、非開示記録も含め、保管されていないと、再審手続は実効性を伴わない。

このようにして、冤罪被害を救済する仕組みは、ザル法化している。

今ある法改正のチャンスを逃すと、我々は、それこそ、「時代の責任」を負わされる。

幸いにして、日弁連や各地の弁護士会は、それぞれ総会決議を行い、それによる働き掛けを通して、国会議員の多くが再審法改正を早期実現する議員連盟を立ち上げてくれており、また、全国の都道府県議会、市町村議会、県知事、市町村長らから再審法の改正を求める意見書が続々と寄せられている。

それに、マスコミの論調も改正を支持する方向にある。

この機を逃さず、是非とも法改正の実現につなげたいものだ。

「石丸現象」をどう見たか

東京都知事選で前広島安芸高田市長の石丸伸二(41)が、何と、165万票を獲得して、2位に食い込んだから、識者らを慌てさせている。

今までは、若年層は政治に関心がなく、従って投票率も低かったと、思われてきた。

また、その原因を、上の世代はかつての高度成長期(バブル経済も含む)を謳歌してきた、若者はその後に起きた経済の長期低迷の中で育ち景気の良さなどを知らない、それなのに若者は年金で上の世代の面倒を見なければならない(これでは仕送りしているのと何ら変わらない)など見られていて、こんな閉鎖社会では若者が政治に不満を抱くのは無理もない(それどころか政治への関心を失い諦めることになる)と、決めつけてきた。

ところが、今回は、若者が多く投票する結果となり、それも、既存政党を避けている。そこから何を読み解くかになるが、一つには既存の政党や候補者が陳腐すぎて、応援したくなる相手がなかったことの裏返しであるかも知れない。

そういえば、石丸伸二氏の政策には、今ひとつ訴えるものがなかったが、次の点で新しさを売りにしていたようだ。

- ・市議会議員をこき下ろす場面を切り取り、ことさらに交流サイト(SNS)にさらすことで、旧態依然として変わらないものに対して、孤立無援のまま戦いを挑むヒロインを演じて見せ、若者の鬱積した気持ちを焚き付けた。
- ・銀行員、市長などの経歴のすべてを潔くさらけ出して好感度を上げ、対立候補者を敢えて「政治屋」呼ばわりしては敵を作る作戦に出た。
- ・視聴者に対してはSNSの拡散を訴え、炎上こそ最たる選挙運動と全く新しい手法を採用した。

要するに、従来の選挙戦術を裏をかいたようにも思われる。

しかし、見落としてはならないのは、テレビ、新聞等では政見や、それに対する論評もまさしく一方通信であり、受動的にして、これに何も反応することもできない。他方、SNS等になると、双方通信となり、そこには拡散することで自ら関わられる余地がある。石丸現象は、ここに着目した点が功を奏したと、私なり捉えている。

ひまわりの憂鬱

ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤニが主演の「ひまわり」(イタリア・フランス・ソビエト連邦・アメリカ合衆国のドラマ映画)は、ロケ地にウクライナ・ヘルソン州を選んでおり、画面に展開されたひまわり畑が多くの人々の印象に残った。あれから54年経った今、ウクライナは、ロシアによる軍事侵攻を受け、先が見えない状況に置かれている。

ひまわりは「太陽の花」といわれている。

1989年12月には、地中海のマルタで、アメリカのブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ書記長が会談し、いわゆる冷戦終結の宣言を行った。

そして、1996年に入るや、両国の国防担当閣僚が、ミサイルを格納してあった地下庫跡の上にひまわりの種を植え、太陽が再び輝きを取り戻したことを喜び合った。

だが、それも束の間、その前にソ連が解体し欧州連合(EU)が発足したりしていたものの、2001年には、アメリカのニューヨークで、同時多発テロが起きるなど期待に反したテロや地域紛争が続発するに至った。

ひまわりは、弁護士の公式シンボルにも使われている。

ひまわりは、輝く太陽の下で元気いっぱいに咲誇り、黄色やオレンジの色彩とエネルギーにあふれた佇まいは、見るだけで、人々の心を動かしポジティブな気持ちにさせてくれる。核使用のリスクと平和の危機に取り囲まれている昨今の状況は、憂慮すべき事態であり、個人でできることはないかを考え、何としてでも、これらの問題を是正し回避しなければならない。



次回案内

岐阜放送「ぎふチャン」

浦田益之の言われてみれば… 9月25日(毎月第4水曜日午後4時5分から)